

---

# 淡々愛歌

伊達倭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

淡々愛歌

### 【Nコード】

N1732D

### 【作者名】

伊達倭

### 【あらすじ】

「僕」と「先輩」の妙な恋愛の話。

少しばかり懐かしい話をしようと思う。

今から数年前。ちょうど、僕が高校一年生の冬の話だ。

当時、僕には恋人がいた。人生ではじめての恋人で、僕は彼女のこと、とても好きだった。

美人という表現は少々違う。可愛いとも少し違う。自分の中で一番しっくりくるのは、きれいな人という形容だった。

一つ年上の先輩だったが、妙に落ち着きのない人だった。基本的に何かをしていないと気が済まない性質で、小柄な体躯で、ちよろちよろと動き回る。そのくせ、出てくるセリフはどれも哲学的なものばかりで、なんともアンバランスだった。僕も人のことを言えないほどアンバランスだったので、なんだか他人に思えなかった。

そんな行動と容姿と言動がちぐはぐな先輩だったが、とりわけ妙なのは男の趣味だったと思う。つまり、僕はわざわざ選ばなくてもそのへんに転がっているレベルの、どうでもいいような高校生だった。容姿にはコンプレックスを抱えているし、性格は内向的でいずれは引き籠もる可能性も大。勉強も運動も並以下で、お洒落に気をつけたことは皆無だった。

「あんだ、もうちよいちゃんといいや。これからあんだに告白するウチの身になってえや」

だからと言って、注意されながら告白されることになるとは夢にも思っていなかったが。

先輩は僕を大人にしてくれた。否、精神的な意味での話だ。

なんせ、注意しながら告白するような世話焼きかと思いきや、外に遊びに出るとあっちに行ったりこっちに行ったり。子犬も尻尾を巻いて逃げ出すような勢いで動く。

「先輩、もうちよい静かに行動しましょうよ」

「あんたが手綱握つとき。走り回るけど、案外物分りのいいワンコやし」

実際、先輩に振り回されたおかげで、小動物的な人物の突飛な行動を笑って許せるようになったのは、その後の人間関係の形成において、大いに役立った。

「あんたは動かん割には、起伏の激しいヒトやね」

逆にメンタルな方面では、先輩は僕よりもずっと大人で、度々訓話を聞かされた。今でもその言葉を思い出し、自分を抑制しようとするのだが、最近記憶が薄れてきて、うまく思い出すことが出来ない。

外見と物腰だけが大人びていた僕と、心の奥が大人だった先輩は案外といいコンビだったのかもしれない。一つのを二つで割ったかのように、僕達はぴったりはまった。放課後の部室で先輩と二人で黙々と読書をしていると、なんだか自分が先輩と釣り合っているかもしれないと感じて、得心していた。

「先輩、そろそろ帰らへん？」

「いいやん。どうせ見回りも来うへんし明日までここで本読んでこ」

「俺はええけど。家に家族いるんちゃうん？」

「友達の家に泊まるつてのは、パターンとしてありきたりやんな？」

「俺はそれでいくつもりやった」

「まあ、どうせウチはオカンしかおらんし、それで十分やろ」

先輩の家庭の事情は知らなかった。父がいないことは知っていたが、聞いても教えてくれなかった。僕の家も父しかいなかったし、詳しい理由は語らなかった。苦労の共有もできただろうに、それをしなかったのは怖かったからだ。

僕と先輩はその日、部室でひたすらに本を読んで、別のソファで寝て、明け方に冷えたのでようやく、くっついて寝た。押し倒すこともできたのだろうが、不思議とそんな気にはならなかった。

先輩と別れたのは、付き合って一年ほど経った日のことだった。理由はものすごく端的で、先輩の引越し。遠距離恋愛に持ち込もうと奮起したが、毎日学校で顔を合わせていた人と、半年に一度しか会えなくなる状況は、高校生には辛すぎた。

先輩が引越してから約半年。初めての再会のために、僕達は申し合わせたかのように別れ話をとんとん拍子で進めた。

「先輩が引越しせんかったら、続いてたんかな？」

「そういうことは、言ったら男を下げるだけやで」

二人の住んでいる間をとって、見知らぬ街で待ち合わせた僕達だったが、先輩は初めての町で、すぐふらふらと彷徨っていくので、全然説得力がなかった。

その後、一切連絡は取らず、まったく別々の道を歩むことになった先輩と僕だったが、何の偶然か、大学が同じだった。よくよく考えれば、先輩の学習法なんかも教えてもらっていて、先輩の興味のある教科を積極的に勉強していたのだから、格段の不思議というほどではなかった。葬式か何かがあれば、いずれは会うことになると思っていたこともある。

それでもキャンパスで先輩を見かけたときは、流石に懐かしさで胸がいっぱいになった。

「先輩」

僕が呼びかけると、先輩は不思議そうに僕を振り返り、次の瞬間に脱兎の如く駆け出した。

「なんであんたがここにおんねん」

「ニアミスちゃうか？」

入学したばかりのキャンパスで追いかけてをしながら、叫ぶように言葉を交わした僕と先輩は、早々に有名人になったそうだ。

先輩は一浪したらしく、僕と同じ学年になっていた。相変わらず先輩と呼んでいたが、たまに怒られた。そんなやりとりが面白くて、

僕はずっと先輩と呼び続けた。

先日、先輩の結婚式に出向いた。相手は僕と先輩の先輩。ややこしい。つまり、大学で入ったサークルの先輩だった。僕とは対照的な男前で、明るく爽やかで、収入も多かった。

二人が付き合っているのは知っていたが、結婚するとは思っていなかった。

「先輩。結婚早々、昔の彼氏と二人はマズいやろ」

相変わらず、行動は突飛でめちゃくちゃで、糸のない凧のような人で。

「弟と会う分にはかまわんやろ」

「ま。そりゃそうやな」

僕も、相変わらず昔のまま。

先輩と僕が実の姉弟だと知ったのは、最近だ。親の話をしなかったのも、決して一線を越えなかったのも、僕達は薄々に気づいていたからだろう。僕達よりも、両親が先に気付いて引き離れたおかげで、ついぞ一線を越える機会すら失われ、キスすらしていない僕達は、実際に仲のよい姉弟のような関係でもあった。

それでも、僕は姉　否、僕は先輩を未だに大好きで。多分、先輩も旦那の次くらいには僕のことを考えてくれているのだろう。

気付いたときは三日三晩熱を出すほどに落ち込んだ血の絆も、こなくなった今では感謝をしている。それだけの思考の柔軟性も先輩の行動につき合わされていたおかげで身についた。それがいいことなのかはわからないが、今の僕には都合がいい。

なんと言ったって、未だにこんな会話ができるのだから。

「もし、僕達が姉弟やなかったら、まだ続いてたのかな？」

「そついうこと言ったら、また男が下がるだけやで」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1732d/>

---

淡々愛歌

2010年10月8日14時40分発行